経ヶ岳（福井）

【日程】2013 年 6 月 15 日
【エリア】白山系
【形態】ハイキング
【メンバー】清岡、池田、小林、伊藤、八尾
【報告】八尾

≪ルート／タイム≫
６月１５日
中の平避難小屋（5：40）～法恩寺跡（6：30）～白山伏拝ピーク（7：05）～北岳（8：50）～
経が岳（9：40/10：20）～保月山（11：40）～林道（経が岳登山口）（12：25）～
（(林道歩き（約 9 キロ？)）～御堂の滝（13：20/13：35）～避難小屋（14：00）
６月１６日

≪報告≫
６月１５日
白山山系、三ノ峰から別山、そしてチブリ尾根を市ノ瀬に下山する予定だった。台風 3 号が去り、低気圧が北から下がってきた。あれ程、梅雨期とは思えない日照りが続いていたのに一転、途中どこかで、或いはもう降っているかも知れないということで中止。予定を変え、その日の午後 1 時出発。中の平避難小屋を目指した。出掛ける時すでに大粒の雨。川沿いを走行していた午後 4 時頃、前方が見えなくなるほど霧に包まれていた。K の頭の中の地図を頼りに川沿いを走行していたが小屋らしきものが見当たらない。天気がよければまだまだ明るい時間だ。記憶に不安を感じ引き返す。（結果的には正しい方向であった）気が焦ると不安が不安を呼ぶ。有料道路を走行。10 個の目が右往左往する。「**あった！**」立派な避難小屋である。先客がいた。1 階に陣取り宴会。明日の天候に期待して床に着く。

6 月 16 日
午前 5 時 40 分出発。小雨降る中を法恩寺山に向かった。今朝は雨具の内も外も梅雨真っ只中。まるで蒸風呂。階段状の登山道が法音寺跡近くまで続く。雲が流れ、青空が見えてきた。白山伏拝に到着したときにはもうすっきり晴れ渡り、まだ雪が残る白山が目に飛び込んできた。右前方にはこれから行く、経ヶ岳が立派な姿を見せていた。
当然のことではあるが、雨天、曇り、晴天では目を楽しませてくれる度合いがあまりにも異なるものである。

左手に白山、別山、三ノ峰を眺めながら北岳、経ヶ岳に向かうのだろうと、誰もが思っていた。が、待っていたのは、頭の上まである藪である。往生した。藪を掻き分け掻き分け、道を探りながらの前進である。藪が途切れてほっと息をついだ。そのとたん、先頭を歩いていた、I の姿が、ストーン。大げさに言えば、上下の視界の範囲から消えた。突然のこと。

底なし沼だと一瞬思った。ズボズボ。助けなければ。どうしよう。かろうじて最悪の事態は避けられた。沼には底があり、もがきながらも I は脱出した。静寂だった沼が掻き回され、ヘドロのにおいが漂った。臭いとはいえない。先頭をまかせっきりで、ただ彼に追随しているに過ぎない Y にとっては、申し訳ないと思うしかなかった。そこからまた藪漕ぎ。

目の前の藪が I が歩くことによって、ピンピンはねる。泥が顔に当たる。それを避けようと絡まった藪の下にできた空洞を膝、腰をかがめて歩いた。そんなの続くわけがない。しんどくって、体力もたない。藪を両手で振り分け懸命に歩いた。それなのに後ろから、「藪を踏んずけるな」「手で掻き分けろ」「下を潜れ」等々、ワイワイ言う。「私だってやってる」「やってるのにできない」って、怒鳴り返してやった。

藪が途切れるのは一瞬。いつの間にか、ガスが上がってきて、目を楽しませてくれていた光景はすでに闇に包まれていた。左はところどころ切れている。藪をつかみながら、身の安全を確保しながらの前進だった。やっと山頂。結局 2 時間、行程の 2/3 は、藪の中。I は藪に帽子を取られ、その後ろを歩く K も気付かないほど、皆、藪と格闘した。

六呂師高原スキー場にいたる登山道を途中の林道に駐車し、保月山を経由、経ヶ岳が一般のルートらしい。そういえば、我々、山頂に着くまで誰とも行き会うことがなかった。経ヶ岳の山頂で、「へ～あそこから！」「藪はこれから整備されるのでしょうか？」「あの道はほとんど利用されないから、整備はされない」この会話でどんなに大変な登山道だったか理解できるだろう。

法恩寺山経由経ヶ岳の道は昭和 40 年 8 月に開かれた道らしい。山頂に記念碑があった。その石碑も寝っころがっている程だから誰も見向きもしない登山道なんだ。当初は白山、別山、三ノ峰等を見ながら、山を楽しんだ道だったのだろう。
同じ道をもどりたくないと思った。復路は右が崖、滑ってしまうと命がない。ぬかるんでいるところもある。危険。

今年は雪解けが遅かったらしい。今カタクリの花、イワウチワ、イワナシがところどころで自己主張していた。一般道を下山することになった。問題は林道に下りてからの林道歩きだ。緩やかなくだり、そして緩やかなのぼり、延々と続く。小屋には果たしていつ着けるだろう。誰にも見当がつかない。御堂の滝で昼食。みんなの心の中は、一足先に戻って

行ったＩが、車で迎えに来てくれることだった。しかし、多少我々より速く歩いても、小屋までの距離が短縮されたわけでもない。また到着してから、ヘドロを、においを流す時間も必要。ジーと待っていても期待薄。歩こう。行こう。Ｋの声。立ち上がった。するともう一人のＫが、「車来た！」（すぐ自分の車だとわかったようだ。）ププー　驚きと喜び。耳に、体に、心地よく響いた。

「なぜこんなに早く？」Ｉが一人歩いていると山菜取りに来た人が、ピックアップしてくれた。また大変親切な方達で小屋まで送ってくれたとのこと。
世の中には素敵な人が本当に多い。この喜びを今度はほかの誰かに返さなければ。御堂の滝から随分走って小屋に着いた。帰りの準備をして、温泉に入り帰宅の途についた。悪戦苦闘はしたが最後には人の善意に心から感謝した山行だった。